

例

親子で二人三脚

太子小学校 太子 太郎

二人三脚という言葉を聞くと、多くの人は運動会の賑やかな風景を思い浮かべるかもしれません。しかし私にとってこの言葉は、娘と共に歩んできたこれまでの子育てそのものを表す、特別な言葉となります。

娘が小学校に入学したばかりの頃、新しい環境に馴染めず、毎朝のように登校を渋っていました。玄関で私の服の裾を握りしめ、涙をためている小さな姿を見て、私は焦りと不安で胸がいっぱいになりました。「早く学校に慣れてほしい」という私の気持ちばかりが空回りし、無理に背中を押しては、娘をさらに頑なにさせてしまう日々が続きました。

そんなある日、ふと、「私は自分のペースで娘を引っ張ろうとするばかりで、娘の歩幅を全く見ていなかったのではないか」と気付きました。それはまるで、息の合わない二人三脚のようでした。私が焦って大股で進めば、娘はついていけずに転んでしまうのは当然のことです。

それから私は、進むスピードを落とすことに決めました。朝、学校に行く前に「今日はどのあたりまで一緒に行こうか？」と娘に問いかけ、彼女の「ここまで」という言葉に歩調を合わせました。校門まで行けない日もありましたが、焦らずに「一歩進めたね」と声を掛け合いました。まさに「いっちに、いっちに」と呼吸を合わせる二人三脚の練習でした。

数ヶ月が経つ頃、娘は少しずつ笑顔を取り戻し、やがて私の手を離れて一人で校門をくぐれるようになりました。

子育てという二人三脚は、親が引っ張るものでも、子どもに引きずられるものでもありません。お互いの足元を見つめ、声を掛け合い、時には立ち止まって、めざすゴールをじつと見つめる。そうして育んだ親子の絆があるからこそ、いつかそれぞれの道を歩き出すその日まで、私たちは共に一歩ずつ進んでいけるのだと確信しています。